

Title	コミュニケーションと記号としての身体
Author(s)	大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2005, 5, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12160
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コミュニケーションと記号としての身体

大坊 郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

われわれは、多様なチャネルを含む相似形としての身体を有するが故に、コミュニケーションが可能となり、発する者と同じメッセージを共有することができる。身体という前提があつてこそ社会性を築くことができるともいえる。現代において、大方は、このような共鳴体としての身体が存在を顧慮することなく、コミュニケーション行動を行っており、しかも、直接的には身体性を大きく超えたコミュニケーションが日常化しつつある。身体自体のコミュニケーション性を抑制することは、次第に身体を損ない、共鳴できるはずのメッセージを適切につなぎ難くする危険性をはらんでいる。身体に対する衣服の意味もこれに照らして考えることができる。身体を通じてメッセージを形成し、他者と同形の身体を通じてこれを受け取ることができるからこそ、人は社会性を獲得できているのである。

キーワード：対人コミュニケーション、チャネル、身体、衣服、記号

相似形としての身体を媒体として コミュニケーションは成立する

通常、人は、自分の伝えたい心的メッセージを身体を介して発信し、他者はこれに共鳴する自分の身体を通じて受け取る。ただし、身体に由来するチャネルの行動逐一にメッセージが要素的に対応するものでないことがほとんどである。相手に伝えたいメッセージを音声、しぐさ、顔の表情等の多様なチャネルに連鎖的に込める(大坊, 2001, 2003)。例えば、相手の責任を責め、非難するために、「拳を振り上げ」、「眉間に皺を寄せ」、「大きな声を発する」とする。その相手は、この行動を相称的に自分の身体に置き換えて「感じる」。あの拳の上げよう、深く刻まれた眉間の皺、いつもの穏やかな声とは違うあの甲高い声を異様なこととして受け取る。それは、同型の身体を持つ者である、つまり、一種の鏡、共鳴体を持つことによって可能になるはずといえよう。もし、一方が、これと異なる身体を持っているならば、「同様な」解釈は容易ではないと考えられる。コミュニケーションは、われわれにとって多くの当たり前になっている前提があるがために可能なことといえよう。コミュニケーションの発生、その歴史を考えるならば、人びとは、互いの身体を照らし合うことによって直接的にメッセージを交感していたであろうことが推測できる。身体各部が掌るコミュニケーション機能が十全に働く限りにおいては、精密に共鳴していたであろう。しかし、多様な価値観を持つ人びとの登場、文化的な多様化が進み、「共鳴する」ことに、条件が付与され、あるいは、表出や解釈に段階の違いが生じてきたと捉えることができる。換言すれば、相互作用形態が複雑化し、「解釈」の余地、含意が生まれざるを得なかったからといえる。個性を持つ人びとが多くの活動を行うようになったための必然の

所産といえよう。

以前の SF コメディ映画で、異星人が地球を訪れ、ある家庭にやってくる。そこで地球人がどのような特徴を持つのかを探るために、先ず最初に行ったことは、変身、地球人と同じ身体を真似て作ることであった。そして、声を発すること、手足を動かすことを学ぶ。そして、やっとコミュニケーションが可能になり、地球人の特徴を知ることになる。ここで注目したいのは、同じ身体の造作を得、相手と同じ行動を取ることができるようになって、「やっと」考えや感情を知ることになったということである。われわれは、あまりに生まれながらにそれぞれが「同じ」身体を持っているので、この前提条件を自明のこととしているので、考慮できていないといえる。送受信の「同事体」である身体を介することができるので、互いのメッセージを受け取り、意味を解釈することができるといえる。同じ身体を前提として用い、他者と同じ行動をとってみる(真似る)。そうすることによって、理解していくことが可能になる。他者の真意を最初から理解することは難しいが、相手と同じ行動を繰り返してとってみる。そうすることによって、こういう場面なら、こう行動するのかという経験を積むことによって次第に相手の意図を理解していくことができる。身体を介しての模倣が理解の糸口となる。当然のことながら、完全に正確な理解は簡単ではない。われわれの日常生活において、たとえ親密な関係にある者でも、それなりの共通する知識と多くの推測によってその関係を維持しているのであり、記号化と解釈が完全に一致することはない。その齟齬の可能性があるので、他者理解の謙虚さがあり、また、その齟齬を埋めようとする不断の努力が払われるからこそ、常に安定を求める社会的行動が展開されるといえよう。

あのミロのヴィーナスの像を思い起こして欲しい。あ

の像には両腕が損なわれている。研究者によって見解の違いはあるが、ある研究者は、あの胴体や肩の特徴から、右腕が身体の前に向かい、左腕は左に向けられていると推論している(美術解剖学の専門家は微細な考察をするであろうが、ここでは、その域に踏み込めない)。このような推論にはある程度の解釈の幅があるが、基本的には、身体構造についての一一致した見方があり、そのことからすると、相応の推測(解読)が可能となる。自らが身体を持ち、それを介して他者とのつながりを持つことができることからそれが像であろうと生身の人間であろうと、推し量って考えることができるのである。

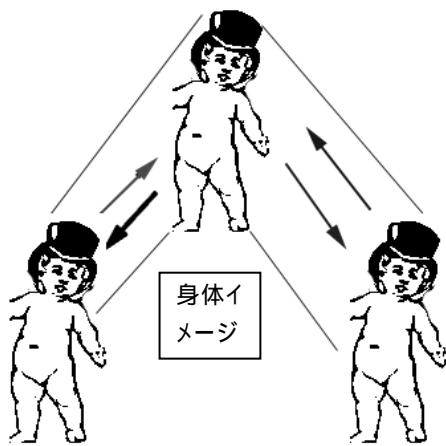


Figure 1 互いに相似形としての身体を持ち、チャンネルの効果について共通の意味を前提としてコミュニケーションは可能となる。

やまだ(1996)は、母子間に見られる同調を示すコミュニケーションを互いに共鳴して「うたう」かのような共同体としての「現象」として捉えている。両者の送受信は高度に共鳴し、他者が介入しにくい濃密で、要素的には分解できない全体性をなしているとしている。自他の識別を前提としない融合的世界から発して、しだいに「共振する」ことによって身体としての自分と鏡映的な他者を認識し、世界を変えていくことに通じる必然的現象として、同調傾向を理解している。さらに、ブッシュマンの社会において、採集、日常的な協同作業(獲物の解体作業、家屋建築時の作業など)などの場面で参加者の一連の行動が互いに同期することも観察されている(今村, 1996)。今村は、個人から発されて次第に伝播していくという要素的なことではなく、「既に」人々に共有されている気分が、自ずと表出し、互いの身体に響き合うといったものであるという人類

に内在する元来のコミュニケーションであると述べている。

そして、菅原(1996)は、ブッシュマンでは、女性、子どものみならず、成人の男性でも、おかしくて笑いこける際に、相手と互いに肩をつかみ、身体を押しつけ合いながらおかしさを身体の動きというリズムで感じ合うことを紹介している。これは、心理的な距離のない直接的な身体による一体感の共有なのである。

また、歴史学者である池上(1992)は、身体的なコミュニケーションこそが、「社会」を構築する重要な単位になっていることを指摘している。それは以下の記述に見ることができる。

「身振り 他者の目を意識して作られ、他者にむかって示され、そして固定化されてゆくものである。これは身振りを現実に行っている者たちがたとえ無意識にそれらの仕草をしているとしても、またかりにその場に他人がおらず、一見ひとりであるときでさえ、あいかわらず事実であろう。つまり、身振りとは『社会関係』のなかではじめて効力を発揮するものなのであり、また身振りが社会関係を維持更新し、あるいはあらたに作りだしているものである。別の言葉でいいおせば、社会は、身振りの発信する目にみえない情報の網の目に覆われており、また、それによって文節化されているのである。」(池上, 1992, p. 10)

このように言を進めてきた意図は、他者との関係を反映し、実現するコミュニケーション行動は、身体に由来し、身体を通じて読み取ることでできる一連の身体現象であることを示すことにある。このような見方は、原初型としてのコミュニケーションに注目してのことである。現代において、大方は、このような共鳴体としての身体存在を顧慮することなく、コミュニケーション行動を行っており、しかも、直接的には身体性を大きく超えたコミュニケーションが日常化しつつある。CMC(Computer Mediated Communication)や、ケータイによるコミュニケーションなどがそれに当たる。実は、この時代的趨勢は、身体自体の特徴を強調あるいは変えようとして試みられてきた衣服との関係に比喩することができる。

コミュニケーションは衣服になぞらえるか： 身体を覆う隠すことは「自己を顕す」こと

肉体(素材としての身体を強調するためにこの語を用いる)こそは紛れもなく自分のものであり、誰もがこれを否定して自らを証明できるものではない。自己を他と識別しうるものとしてアピールするものであり、他者との多様な比較の基盤となるものでもある。しかし、それはモノとして既にあるものであり、自在に変幻

できるものではない。これは、常に相対的な意味を持つ心理性とは異なる点である。即ち、肉体は、紛れもない自分そのものでありながら、完全にこれを隠蔽できるものでもなく、作り変えることもできない。このことが、飾る、装うことの出発点になっている。そして、生得的な自己の表れを超えて、化粧や衣服によって自己の表現法が拡大し、他者の目を利用した自己のアイデンティティの範囲が広がることにもなる。即ち、人工的に改造するにはコストが大きすぎる肉体を隠しながらそれに替わる方法として化粧や衣服が生まれたといえる。そして、飾るということは、他者という評価者を必要としたことである。すなわち、元来所有している身体の特徴を一旦覆うことによって、その特徴を増減あるいは変質させることのできる衣服を第二の自分として用いたのである。自己の本体自体は容易に可変し難いので、簡易な取り替え可能な衣服によって自己表出の範囲を拡大したのである。しかも、このような開発は、長い歴史を有しているのであって、些細な付加価値としてこれを見なすものではない。人類の発生の歴史を振り返ると分かることであるが、飾ることへの並々ならぬ工夫が間断なくなされてきていることに見てとれる(古代エジプトの壁画に女性たちが互いに化粧し合っている様子が描かれており、また、白い肌を手に入れるために、鉛毒による皮膚の炎症や内蔵疾患という犠牲を払いながらも高価な白粉を用いたことなどにその典型例を見ることができる)。容易に得難い「モノ」を手に入れようとして、他者と競うことも厭わない。そこに、一層社会的な価値が高められることになっている。

このような衣服の登場とその役割は、身体に対して、身体の特徴を道具として用いて、伝達性を増幅する、あるいはその特徴を補うように働くコミュニケーションと類似しているといえよう。

なお、北山(1999)は、人間にとって、衣服は文明化、- 自然との境界を明確にする行為 -、のシンボルとして位置づけられること、人間が自然に与えられた肉体のままであることを否定することに結びつけられるとしている。つまり、自然にあるものを正確に意識化することは容易ではないし、自己の優位さを確認し難い。したがって、なんらかの方法によって、肉体に注意を向け、コストをかけて、それを支配する必要がある。歴史的に見られる、身体加工(入れ墨、唇飾り、長い首、長頭化)などは肉体との心理的距離を作り、操作可能なものとして位置づける例であるとしている。現代では、ピアス(耳に限らない)はポピュラーであり、髪の毛のカラーリング、エステティックも同様な例である。流行の先駆けをなすイノベーターは周囲の好奇

の目に晒され、否定的な評価を受ける可能性というリスクを抱えてのことであり、同様な自己意識化の行動であろう。このように考えると、人は、心理的、物質的、経済的コストを伴わなければ自己の概念化ができないものようである。それがために、合理性を超えた衣服の工夫、装飾がなされているともいえよう。

このような例を考えるならば、身体に対する衣服は、コミュニケーションになぞらえることができよう。衣服は、他者と交感するために敢えて創りだされた身体の仮面であり、時には、身体性を加減して映す凹凸レンズの役割を持っている。

なお、外見の要因は直観的に視覚情報として入手され、優先的に解読吟味されるものである。しかも、衣服は変更可能であり、また、人間関係の種類や場面などに応じて柔軟に選択される。選択するのは当事者であるにせよ、他の外見要因に比べて社会的な手段としての意味が強いチャンネルといえよう。したがって、衣服自体による特質とともに着る者の身体スタイル、容貌、そして場面などとの交互作用として、伝える意味は同じにはならない。

身体がツールを用いることと身体自体のメッセージ性

身体との関係において、衣服で身体を覆うことは、顔にコミュニケーションの優位を譲ることになり、仮面をつけることによって、身体は再びコミュニケーションの主たる道具として重要になるとの指摘がある(鷲田, 2005)。メッセージ性を持つ身体の一部を隠すことは、隠されていない身体部位の発信を強調し、また、隠された身体は、そのメッセージ発信を可能にする出口を求めて、右往左往することになる。身体における主導権争奪の動きを生むことになるといえよう。近代から現代においては、天然であることよりも、加工することを優先し、人工的なツールや装飾を好んできた。そのことは、次第に、身体が発するメッセージを率直に汲み取ることなく、いわば、技巧的な演出自体を楽しむともいえる自己呈示的コミュニケーションがなされるようになったのではなからうか。共鳴体としての身体を持ちながら、敢えてそこから距離のある表現を行うことによって、時に、錯誤すら生じ得るリスクを抱えたコミュニケーションの危うさを楽しむというゲーム時代を招来したと考えることができる。互いに理解する、特定の情報を伝え合うという紐帯的なコミュニケーションに対して、個々の個別性を大前提とし、分かり合うことを目指すという人間の根底的な方向性を求めない。ここに、分かり合えることを求めることによる膨大なエネルギーの消費、分かり合えない場合の徒労感や疲労感を先

取的に回避しようとする傾向を読み取ることができる。時間消費的に便利な、コストの少ない間接的なコミュニケーション方法への依存性やコミュニケーション・ツールの異様な開発指向、そして、対面的で時間をかけた相互作用機会の減退などにその根拠を求めることができる。

相似形の身体を互いに掲げ合わずに個別の情報をつなぎ合わせるかのような他者とのコミュニケーション行動が近年多くなっている。しかし、身体から遊離して断片化したメッセージをつなぎ合わせて、モラーな心的表象を獲得することは容易ではない。身体自体のコミュニケーション性を抑制することは、次第に身体を損ない、共鳴できるはずのメッセージを適切につなぎ難くなる危険性をはらんでいる。

われわれは同時にいくつものコミュニケーション表現手段を用いている。対人認知の手がかりの優位性についての研究に見られるように、対人関係において何をを目指すのかによって用いられる手がかりは異なること、さらに場面の要因を含めたマルチ・チャネル的な研究が一層必要である。

人は、所属集団や社会に適合した、帰属意識を持ち、衣服やコミュニケーション・スタイルに反映させる。元来、自己を規定する係留点を多く持たない人間は、自分のいる環境や条件を整えることによって、内発的ではなく、外在からの拘束という形での帰属性を好む傾向がある。

ごく一般的には、自分らしさを追究し、「自分らしい表現」が心がけられるのであろうが、それは急速に減退してきている。例えば、高校生のルーズ・ソックス、高校生・大学生のキャミソール・ファッションなどは、世代の制服として定着し、機能している。流行の持つ先駆け意識は既に失われている。いつの時代にも同様な「現象」は起こるものであるが、現在の衣服の機能はウチとソトを切り替える「身支度」としてのもではなく、「私」と「公」をいかに平準化するか(私をもって公を取り込もうとしての)、空間・時間を一本化するかを目指しているといえよう。これは、個性化ではなく、没個性化であり、公空間をも私空間化しようとしているといえる。

自分が他者から「見られる」ことへの意識が昂じてきている。自分がどう他人に映るのか、受け入れられるのか、排除されやしないかといった受動的な自己の社会的位置づけへの懸念が強い。人は他者とのつながりの中に生活し、自分自身の社会的意味を発見するものである。しかし、当事者自身の自己、心的世界に対して、外見はこれに密接に関係するものではあるが、容易に変えられ、人工的に操作できる特質を持

つ。換言すれば、心的メッセージを生み出す内的な自己の主体に対して、化粧や衣服は表現形としての自己、拡張された自己なのである。勿論、この自己と外見との相互関係は本質的といえる不可分な関係にあることは事実である。この意味において、コミュニケーションの含み持つ多層的な構造が決して収束的ではなく、拡散的な機能を持つことを再認識しなければならない。

人は、社会性を前提にして成り立っているが、具体的な社会的場面において、自分の持てる要素を全て晒しているわけではない。特定の他者や想定された他者の総体としての世間に対して、示している「部分」を表している。真の自分(当事者自身がこれもすべてを把握しているとはいえないので、仮説的な概念であるが)の一部を切り出して呈示する。その際に、示したい自己をアピールするために演出する。それは、相手からの受容的な評価を期待してのことであり、かつ、特定の文脈や文化規範を前提にしてのことである。特定の他者との相互作用事態において対応する他者の背景には多くの他者との相互作用経験やネットワークを築いている「他者」(世間)がある。相互作用の経験に基づいて、自分がどのように評価されているのか(評価されるであろうか)を懸念する。この意味で、象徴的相互作用論のいうように、世間を自らを映す鏡としているといえよう。ただし、この鏡がストレートな等身大の自分を映すのか、あるいは、一部の特徴を誇張して映すのかは、他者とのネットワークの蓄積をどれだけ有しているのかによって決まる。

「自分」の「姿」を他者(あるいは他者を特定しない意味での世間)に演出して示すことは、原初的な共鳴性を犠牲にしての迂回的で(その意味でアソビでもある)、人為的なコスト選択を意味する。ただし、化粧は、衣服に比べて、顔を中心とする装飾であり、身体自体のことであり、個人の同一性を直接的に演出する意味合いが大きい。さらに、自分らしさを強調したり、普段とは異なる自分を演出するためにも用いられる。

野村(1983)は、コミュニケーションの前提としての身体の特異性について以下のように述べている。

「…、人間の身体はたんなる記号ではないのである。むしろ、身体性の意義は、すべてを記号化しようとする人間の文化のあらがいがたい作用をすりぬけて、記号であると同時に、記号以前でも以後でもあるということにあるというべきであろう。いいかえれば、身体という現象は、記号の生成過程であると同時にその解体過程なのである。」(p. 231)。これは、便宜的にコミュニケーションの記号化と解釈とひとつのプロセスを2つのプロセスのように表現することがあるが、それは、

機能的にいうならば、誤った認識を生じかねないことであると警告している。われわれは自らのメッセージを身体過程として発し、それを身体に由来するチャンネルに他者に可視的な行動として込めている。すなわち、自らが、メッセージを身体を通じて形成し、他者と同形の身体を通じてこれを受け取ることができるので、その意味を引き出すことができる。これをもし、連続するものであれ、2部構成で考えるならば、記号化と解読の受け渡しにおいて現状以上に齟齬が大きくなる可能性がある。それは、記号化と解読という連結点において翻訳を要するからである。しかし、野村(1983)の指摘にあるように、記号化も解読も同一の心的メカニズムから発することであり、同根、同軸の現象であり、どちらの向きで表現するかの違いでしかない。そうするならば、身体性を直接のベースとしない間接的なメディアによるコミュニケーション行動は、自他においてより符合しにくいものであり、一致したメッセージ性を円滑に伝え合い難い可能性が大きい。この状況は容易には軌道修正し難く、また、同時に相應には時間軸における利便性も否定できないことを勘案するならば、敢えて身体性をシミュレーションしたコミュニケーション状況を作り出す工夫が必要ではない

かと考えられる。

引用文献

- 大坊郁夫 2001 対人コミュニケーションの社会性 対人社会心理学研究, 1, 1-16.
大坊郁夫 2003 社会心理学からみたコミュニケーション研究 対人関係を読み解く 社会言語科学, 6, 123-137.
池上俊一 1992 歴史としての身体 ヨーロッパ中世の深層を読む 柏書房
今村 薫 1996 同調行動の諸相 ブッシュマンの日常生活から 菅原和孝・野村雅一(編) コミュニケーションとしての身体 (pp. 71-91) 大修館書店
北山晴一 1999 衣服は肉体になにを与えたか 現代モードの社会学 朝日新聞社
野村雅一 1983 しぐさの世界 身体表現の民族学 NHK ブックス 429 日本放送出版会
菅原和孝 1996 ひとつの声で語ること 身体とことばの「同時性」をめぐって 菅原和孝・野村雅一(編) コミュニケーションとしての身体 (pp. 246-287) 大修館書店
鷲田清一 2005 ちぐはぐな身体: ファッションって何? ちくま文庫
やまだようこ 1996 共鳴してうたうこと・自身の声がうまれること 菅原和孝・野村雅一(編) コミュニケーションとしての身体 (pp. 40-70) 大修館書店

Importance of communication and body as semiotica

Ikuko DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

It is enable us to communicate each others and share the meaning of message derived senders for that we have analogous bodies with various channels. We can build up the social relationships on the assumption of our bodies. While almost people do not consider the role of body as "resonator" between people, they communicate each others superficially. Consequently people expand the content of communicative messages recklessly in daily life. It is difficult to catch on the resonant message containing human linkages that we restrain to draw the psychological presence away of body. Also this forced us to spoil the efficacy of our bodies. Dressing Clothes and giving the appearance contrast to body presence have similar meaning to communication. Because we abstract the common messages from the body and we share these meanings with other people, people can built up the sociality as shown human history.

Keywords: interpersonal communication, channel, body, clothes, semiotica